

看護実践に理論を適用していく過程における看護者の認識の特徴

吹上大祐(基礎看護学)

【キーワード】 看護者の認識の土台, 3重の関心, 理論の適用, 理論修得を促す論理, 看護過程の評価

本研究の目的は、自己の看護実践における認識の特徴から理論適用の過程を取り出し、卒後からの時系列で追う事で、理論修得過程の構造を明らかにし、理論修得を促す論理を導き出すことである。

研究方法は、看護者の認識・表現を支えていたものを「認識の土台」として想起し記述した。表現に至る、判断とその土台となった認識の過程から「判断過程の特徴」を取り出し、時系列に一覧にして研究素材とした。分析は、事例ごとの判断過程の特徴を、実践方法論に照らして「第1の関心」、「第2の関心」、「第3の関心」に分類し、「理論適用の過程の特徴」を取り出した。さらに、これらを時系列に概観して、「理論修得過程の構造」を明らかにした。そして、理論修得過程における事例の位置づけをし、理論修得を促す要素を検討し、理論修得を促す論理を導き出した。それらは、理論の意識的適用を促す論理であり、かつ看護過程における理論適用の評価規準であると言える。以下に示す。

第1の関心の注ぎ方・重ね方は、対象の事実の意味を捉えるために、

- 1 対象が歩んできた人生を時の流れに沿って追い、今起きている現象をその時の流れの中に位置づける。
- 2 諸現象ごとの一般像を描き、それらの意味を看護一般に照らし、特徴を取り出す。
- 3 病棟患者の特殊性を描きながら、疾患ごとの患者の生活一般・治療過程一般像を定める。

第2の関心の注ぎ方・重ね方は、

- 1 対象の事実を一般的に捉えるという第1の関心を深めることで、第2の関心が深まることを意識する。

- 2 自分自身の生活体験において抱いた感情の一つひとつを大切にしながら、生活者として様々な生活体験を積み重ねることで、人間性を高めていく。

第3の関心の注ぎ方・重ね方は、

- 1 対象の事実の特徴を浮き彫りにしながら個別に迫っていく看護を展開させていくために、対象の事実を看護一般に照らしつつ3重の関心を注いでいく。
- 2 より根本の対立の解決に近づいていくために、第1の関心、第2の関心、第3の関心と大きな順序性を持ちながら、次第に関心全体としての厚みやひろがりが増していくこと、すなわち重なりを意識する。
- 3 対象の細々とした事による消耗を感じ取つてくことの技化を促すために、対象の生活の事実に、看護一般を照らしつつ3重の関心を注ぐことを意識する。
- 4 3重の関心を注ぐという理論適用の看護実践を促すために、対象の事実を捉える一般論を定着させる。

3重の関心を注ぐ過程は、

- 1 よりよい看護の方向性を描くためにという目的を前提に、対象の事実を知覚する自己の頭脳の限界を自覚したときは、他者の頭脳を借りながら3重の関心を注いでいく。
- 2 3重の関心を注いだ看護の展開を促すために、「第1の関心を注いだときに看護の必要性を認識できているか」、「第1の関心、第2の関心を重ねたときに対象の目標像が描けているか」という視点を持つ。
- 3 3重の関心を注げるかどうかは第1の関心の注ぎ方に拠ることを意識する。